



## トビタテ留学! JAPAN

日類保健体育専攻

齋藤 拓也

留学開始時の学年：4年

留学期間：2015年5月～2016年4月

留学先：ディクシー州立大学映像学科

### アメリカ留学の決意とトビタテ

私は東京学芸大学の交換留学ではなく、大学を休学しアメリカの大学に留学しました。それは今、学びたいことを、自分の選んだ地で勉強したかったからです。しかし、留学を決意した当時、とりわけ金銭面が大きなハードルでした。

まずはアメリカの大学の高額な授業料をまかなうために奨学金を探しました。そこで完全給付でサポートしてくれる「官民協働トビタテ! 留学 JAPAN」(<http://www.tobitate.mext.go.jp/>)を見つけ、書類を提出しました。書類審査と面接、ディスカッション、プレゼンの選考を終えて幸運なことに合格をいただきました。書類では自分のやりたいことと、日本へどう留学成果を還元できるかをアピールしました。面接では個人面接のほか、6人のグループで同じテーマを議論しました。

学芸大学の交換留学は、授業料は無料ですが、原則として航空券や滞在費は自分で賄わなくてはなりません。それに対して、トビタテは授業料だけでなく、航空券や現地の滞在費も支給してくれるのです。

トビタテの特徴はそれだけにとどまりません。トビタテでは、海外に行く前に事前研修があり、トビタテで留学を予定している学生たちと交流ができるのです。彼らとは、留学の準備段階だけでなく、留学中、帰国後も連絡を取り合っています。世界中で活躍するという志を高く持った仲間には、大きな刺激を受けました。

以上のように、トビタテがなければ私の留学の夢は実現できなかったと思います。

### ユタ州の大学での経験

私はユタ州の大学の映像学科に留学しました。交換留学ではなかったため現地の学生と同じようにテストを受けて入学しました。

映画学科では、映画を撮影する実習もあり、大学が持つスタジオやカメラを利用してクラスメイトと協力して短編映画1本を作るといった学芸大では学べない経験をしました。もっともはじめは授業を英語で聞き取るのはかなり難しく、スマートフォンで授業を録音し、家に帰っては聞き直し、わからないところは隣の学生に聞いたり、個人的に教授の部屋へ質問しに行ったりしていました。



そしてアメリカでの生活が進む中で、日本との違いにたくさんぶつかりました。一つ目は、教授への質問の仕方でした。アメリカの学生は教授が話している最中にも容赦なく割り込んで質問をします。私は最初「失礼な学生が多いな。授業が滞るから後で個人的に質問しに行けばいいのに」と思っていました。そんな私は日本流で授業が終わった後に教授に質問に行きました。すると、教授は「それは授業中に質問しなさい、君がわからないことはみんなもわからないのだから授業中に質問してくれば全体の学びが広がるじゃないか」と怒られてしまいました。私にとっては衝撃でした。

その後は、この反省を活かし、勇気を出して教授の話に割り込んで質問をしました。お陰でクラスの雰囲気にも馴染むことができ、教授とも大変親しくなりました。

二つ目は、生活においての問題です。私はルームシェアをアメリカ人とナイジェリア人とともにしていたのですが、皆、宗教も食文化も、そして寝る時間も異なっていました。とくにラッパー活動をしていたルームメイトは、夜中に爆音を鳴らし出したり、私がなければの金で買った食べ物も勝手に食べてしまったこともありました。どうもいつも他人に迷惑をかけないようにという日本人の感覚とはかなり違うようで、ストレスを感じたのを覚えています。

しかし、あるとき、クラスメイトから「何故そんなにいつも怒っているの？笑顔を見せたほうがいいよ」と言われました。そこで留学を楽しめていないことに気づきました。そんな発想の転換があり、ルームメイトとのすれ違いもあまり苦痛に感じなくなりました。

このように留学では、語学力や専門知識だけでなく、文化の異なる人たちとの関わり合いから多くを学ぶことができます。とりわけ私は、留学を通して、特定の文化に対する偏見をなくし、世界中のすべての人たちと積極的に関わっていきたいという思いが益々強くなりました。

## 最後に

留学を許しサポートしてくれた家族、友人、トビタテの申し込みから留学後も助けてくださっている国際課の方々、私の視野を広げてくれたトビタテの仲間たち、そして留学先で出会った人たちには感謝してもしきれないです。

今後は、アメリカの留学経験を活かし、海外のあらゆる人たちの文化や考え方を理解し日本と外国をつなげる仕事に携わりたいと考えています。

